

キリスト教の四国伝道と今治教会の設立

越 智 真 次

(1) はじめに

今治の商店街のアーケードに並行して金星川^{きんせいがわ}という小さな河川が流れている。今治城が存在した藩政時代まで、金星川は今治城の外堀としてその役目を果たしてきたのである。この川の流れは、今治港の内港へと注ぎ込んでいるが、河口にあたる恵美須町の商業用地の一角には、かつてその場所に今治教会の旧会堂があったことを記す石碑が忘れ去られたように建っている。碑文には次のような内容が記されており、第二次世界大戦中の1945年（昭和20年）8月5日深夜から始まり、翌6日の明け方まで続いた今治空襲によって教会堂が焼失するまで、同地に今治教会が存在していたことを今日に伝えているのである。

今治キリスト教旧会堂跡（碑文中のフリガナは筆者が書き加えた）

明治十二年九月二十一日此ノ地ニ四国最初ノ教会トシテ今治キリスト教会ガ設立サレマシタ 爾来此ノ地ハ今治ノ文化・産業開花ノ発祥地トナリ展開シテ行キマシタ サラニ我が国ノ精神文化ニ大キナ影響ヲ与エタ横井時雄（今治キリスト教会創立者）徳富健次郎（盧花）モコノ地ニ在住シタユカリノ人デアリマス 此ノ会堂ニハ当時米国教会カラ贈ラレタ鐘カアリ日本三大洋鐘ノーツニ数エラレ朝ナタナ打チナラサレル鐘ノ音ハ広ク今治全市ニ響キ渡リ今モ多クノ人々ノナツカシムトコロデアリマス 教会堂ハ昭和二十年八月五日米軍ノ空襲ニヨリ惜シクモ焼失シ其ノ後南宝来町ニ移転シ今日ニ至リテオリマス

昭和四十八年十二月之ヲ建ツ

る上島一高氏とお話する機会に恵まれた。その時の話では、「戦前まで今治教会は現在の場所とは異なり、今治港付近の恵美須町にあり、この今治教会からは歴史の表舞台では注目されていないが、歴史を支えた人材が数多く輩出されていた」という趣旨の話をして耳にすることができた。これを契機に調べてみてわかったことは、今治教会のおこりや、今治教会の教会員として地域の産業や文化に功績を残した人々についての研究成果が地元今治の歴史研究家たちによって文献にまとめられてはいるが、それらの研究は独自性が強く、まとまったかたちで著されているものがないという現状である。個々の地域研究家たちの論考はすばらしいものであり、何とかまとまったかたちで地域の歴史を残すことができないものかと次第に念ずるようになった。今回は紙面に限りがあるため、全てについて記述することはできないが、「キリスト教の四国伝道」と「今治教会の設立」という論点を中心に私なりにまとめてみたいと考える。

なお、本稿の記述については、阿部克行氏の「キリスト教思想と殖産興業への道」今治城築城・開町400年祭実行委員会『今治の歴史風景』2004、飯峯明^{いいみねあき}氏の「今治教会創世期の人々」日本キリスト教団今治教会『創立130周年記念誌』2009、高尾哲^{たけし}氏の「J.L.アトキンソン博士の四国伝道」松山東雲短期大学『松山東雲短期大学研究論集第18巻』1987、を主に参考にさせていただいた。なお、飯峯明氏は本稿の(4)「J.L.アッキンソンの四国伝道」で触れた、飯忠太郎（岩吉）の孫にあたり、同志社大学神学部教授でもあった。

(2) 廃藩置県と今治⁽¹⁾

一昨年末、日本基督教団今治教会の現牧師であ

伊予国は旧幕藩時代において俗に「伊予八藩」

と称せられ、大小の八つの藩によって領地は支配されていたが、事実上は“四藩”というべきもので、松山藩と今治藩、宇和島藩と吉田藩、大洲藩と新谷藩、西条藩と小松藩はいずれも本家、分家の関係でつながっていた。しかしながら、四国の他藩に比べて天領も多く、その複雑な版図および民情に各藩の為政者は相当の苦労があったと思われる。

周知のとおり、1867年（慶応3年）10月、15代将軍、徳川慶喜は朝廷に対し大政を奉還するという挙に出、その時点で事実上徳川幕府は崩壊した。今治藩の藩主であった久松定法^{さだのり}も、薩長土肥四藩の版籍奉還の建白に賛同の意を表し、1869年（明治2年）2月7日、自らも版籍の奉還を申し入れている。それは「全国260余藩中13番目であり、「伊予八藩」の中では最初の奉還であった⁽²⁾」。奉還を申し出た同年10月には、1604年（慶長9年）「築城の名手」として天下にその名を知られた藤堂高虎によって築かれた今治城が、明治新政府の急進な諸改革のもとで廃城と決せられ大破されている。その後、廃藩置県によって1871年（明治4年）7月、今治藩は廃され今治県となり、県庁所在地となったが、同年の11月には今治県は廃され、松山県に組み入れられ（西条県、小松県、今治県、松山県が統合）県庁所在地も松山に移されることになった。県名も松山県から石鉄^{せきてつ}県、さらに石鉄^{せきてつ}県と神山^{じんざん}県（新谷県、大洲県、吉田県、宇和島県が統合）が合併して愛媛県と称されるようになったのは1873年（明治6年）2月のことである。

旧幕藩時代の今治藩は、石高こそ3万5千石と

低かったが、徳川家親戚の大家としての格式を保ち、“兄弟藩”である松山藩と密接に交わり、秩序正しい経営形態を整えていたと考えられる。ところが、破城解体によって今治地域の経済状況は衰退の一途を辿ることになってしまう。上級藩士の一部は官吏や教育界に職を得た者もいたが、150名近くいた藩士の大半は禄を失い、帰農の道を選んだり、商工業にも従事したが、しよせんは“士族の商法”に代表される言葉が残されたようにうまくはいかなかった。“士族の商法”が失敗した原因は、資本が小さく、専門知識に欠け、販路を持っていなかったことに加え、商売を恥とする考えが根底にあったことである。看板を掲げずに商店を営む者もいたとの記録もあり、とても成功するとは考えにくい状況であった⁽³⁾。当時の今治は、海に展けた町で、海に面して町屋が軒を連ねていた城下町の割には、港湾機能を果たす防波堤や、舟を着岸させる棧橋もなく、海岸はすべて砂浜であり、みすばらしい様であったことが伝えられている⁽⁴⁾。

士族階級の没落によって沈滞を余儀なくされ、明治の新時代への対応を模索していた今治の地に、意外な方向から新たな思想が流入してくることになった。プロテスタント系キリスト教伝道者たちの布教活動である。瀬戸内地方の一郷村に堕ちていた港町今治に、彼ら伝道師たちによって西洋文明の思想と情報をもたらされ、これから今治の人々が歩むべき方向が示されたのである。これによって、県内はおろか、四国一円に“文明開化思想”が伝達され、その拠点として今治は一躍脚光を浴び、西洋文明の先進地域として発展の道筋

(1) 阿部克行「キリスト教思想と殖産興業への道」今治城築城・開町400年祭実行委員会『今治の歴史風景』第一印刷、2004、pp. 71-73、を参照し、筆者がまとめた。

(2) 今治市役所『今治市誌（復刻版）』平文社、1973、p. 193、にも同様の指摘がある。

(3) 1876年（明治9年）9月26日付の県の御用新聞であった「愛媛新聞 第六號」には商売に手をだして没落していった士族が民衆からどのように受け止められてい

たかを示す記事があり、投書欄に「當時流行見立」の1つとして「ともに危ないも乃は、人力車と士族乃商法」と書かれている。『愛媛県史』（社会経済5社会）1988、p. 140、ではこの記事の掲載日が明治9年11月26日付と記載されているが、「愛媛新聞（マイクロフィルム版）」を閲覧したところ9月26日であることが確認できた。また、明治9年10月23日付の「愛媛新聞 第拾五號」の雑報欄には「何も出来ぬものは 奉還金を遣^つた士族」という民衆からの投書が載せられている。

をたどっていくことになる。

(3) アメリカン・ボードの宣教師派遣

今治は、1879年(明治12年)9月21日、「四国最初」のプロテスタント系キリスト教会である今治教会(現日本基督教団今治教会)が設立された地である。これまで多くの文献において、「四国最初」と表現されてきたが、『日本キリスト教歴史大事典』から中四国各地の教会の創設時期を検証してみると、岡山教会1880年(明治13年)、倉敷天城教会1884年(明治17年)11月、高梁教会1882年(明治15年)、笠岡教会1884年(明治17年)3月、広島教会1883年(明治16年)11月、鳥取教会1890年(明治23年)2月、日本聖公会松江伝道所1888年(明治21年)、山口教会1882年(明治15年)6月、と表記されており、今治教会は中国・四国地域において最も早く設立されたプロテスタント系教会であると考えられる。

明治の初め、今治の地に福音の種をまいたのは、中国・四国地方へキリスト教の伝道活動を積極的に行った宣教師、J.L.アッキンソンであった。

J.L.アッキンソン(John Laidlow Atkinson, 1842-1908)は、英国ヨークシャー州のウィスク村(Wiske Village)に生まれ、父親は小学校の教

師であったが幼少の時に亡くなったために12歳のとき、先に米国に移住していたアイオワ州の叔父の許に身を寄せた。大学卒業後、1866年から1869年までシカゴ神学校で学び、将来の働きにそなえたが、そこでは、のちに神戸でアッキンソンとともに伝道に従事したD.C.グリーン、J.D.デイヴィスが学友として机を並べていた⁽⁵⁾。

D.C.グリーン(Daniel Crosby Greene, 1843-1913)は1年後アンドーヴァー神学校に転じたが、彼こそはアメリカのプロテスタント伝道団体「アメリカン・ボード」(American Board of Commissioners for Foreign Missions)が日本に派遣した最初の宣教師であり、1869年(明治2年)11月30日に横浜に上陸し、東京に赴いて築地に滞在し、日本語の習得につとめたが、東京、横浜には、すでに宣教師がかなり働いていることを知り、まだ伝道が開始されていない神戸に移ることを決め⁽⁶⁾、翌年3月30日に神戸に来て定住した。これによって神戸にはアメリカン・ボードの神戸ミッションステーション(キリスト教伝道局)が形成され、



写真1 J.L.アッキンソン

今治近代産業史顕彰委員会『商工都市いまばりの夜明け』2009, p.64

(4) 当時の今治の様子を知る手掛かりとして、菅紀子『日本少年 重見周吉の世界』創風社出版、2003, pp.16-17, に「第1章 僕の生まれたところ」の記述がある。その一部を引用すると「僕は今治という小さな港町に生まれた。そこは本土の南にある2つの島のうち東側にある、四国という島の西側に位置している。今治港はみずばらしいところである。引き潮には港湾が浅い海底を見せ、人が歩いて渡ることができる。人々はそこへ潮干狩りに行く。2, 3の小さな川の流れが港湾に注いでいる。またいくつかの帆船と多数の小舟がいつもこの潮だまりに浮かんでいるのが見える。それを囲む家々とはいうと、たいいてい古くて今にも崩れそうなのだが、そこでは食料品を売ったり、漁船から魚を買ったり、また船乗りにも宿を提供したりしている」と、当時の今治の様子が描かれている。重見周吉(1865-1928)はアメリカ留学中に学費を得るために英文の自伝『日本少年』を出版した。全米に日本文化を紹介し

た最初の日本人であるとされている。重見は1865年(慶応元年)11月25日、今治の本町に生まれ、同志社英学校で学んだのちアメリカに留学し、エール大学において医学博士号を取得している。帰国後、3年間東京慈恵医科大学で教鞭を執るが、1893年(明治26年)、本場で習得した英語の力を生かそうと、学習院の英語教員の採用試験を受け、合格し、教員として勤める。この学習院の採用試験において、夏目漱石も同じく英語教員を志していたが、漱石は不採用となり、松山中学の教員として都落ちすることになる。また、重見はクリスチャンであり、黎明期の今治教会に属した信徒であると考えられる。なお、英文で書かれた『日本少年』の原本は今治市立図書館に郷土の貴重な史料として保管されている。

(5) 竹中正夫「宣教師J.L.アッキンソンの伝道とその性格」『基督教研究 第49巻 第2号』基督教研究会、1988, p.82, を参照し、筆者がまとめた。

さらに彼によって1874年（明治7年）4月19日には摂津第一基督公会（現日本基督教団神戸教会、以下神戸教会と略記）が設立されて、中国・四国地方一円にわたる伝道の拠点となっていった。2ヶ月後の6月からは横浜に活動の拠点を移し、新約聖書の日本語訳にもあたったが、聖書の翻訳に果たした彼の貢献は不朽であると考えられる⁽⁷⁾。

グリーンについて1871年（明治4年）11月にはJ. D. デイヴィス（Jerome Dean Davis, 1838-1910）が神戸に到着するが、すでに米国で知り合った新島襄⁽⁸⁾が1874年（明治7年）10月末に帰国し、翌年にかけて同志社英学校開校のための準備に入ると、1875年（明治8年）10月、デイヴィスは新島を助けるために京都に移っていく。同志社英学校は新島校長とデイヴィスの2人の教師をもって発足したもので、デイヴィスは新島の友人かつ協力者であり、同志社の恩人でもあった。

グリーンとともに神戸教会を支え、西日本の伝道にあたったのがJ. L. アッキンソンであった。アッキンソンは1873年（明治6年）9月28日妻であるC. E. グーンセー（Carrie E. Guernsey, 1848-1906）と子ども⁽⁹⁾を伴って神戸に到着している。

妻グーンセーとはシカゴ神学校卒業後、1869年6月に結婚している。妻はマサチューセッツ州の出身であったが、彼女の父親が、アイオワ州の会衆派教会の国内伝道の総幹事をつとめていた縁で、結婚後、アッキンソンは4年間アイオワ州の会衆派教会の牧師をつとめていた⁽¹⁰⁾。神戸ミッションの設立者グリーンは神戸教会設立の約2ヶ月のち横浜に赴き、そのあとを引き継いだデイヴィスも翌年の10月に京都に移ったのに対し、アッキンソンは神戸に到着してから1908年に神戸を出て横浜で亡くなるまで35年間神戸に滞在し、神戸を中心とした西日本への伝道活動の中心的存在になっていったということは言うまでもない。

話は前後するが、開国後のアメリカン・ボードの国内での伝道について少しばかり触れておきたい。1858年（安政5年）、米国総領事タウンゼント・ハリスと徳川幕府との間に日米修好通商条約が調印されたが、その第8条に、「日本ニ在ルアメリカ人、自ラソノ国ノ宗法ヲ念ジ礼拝堂ヲ居留地内ニ置クモサワリナシ 並ニソノ建物ヲ破壊シ、アメリカ人日本人ノ堂宮ヲ毀傷スル事ナク、又決シテ、日本神仏ノ礼拝ヲ妨ゲ、神体仏像ヲ毀

(6) 三井久『近代日本の青年群像 熊本バンド物語』日本YMCA同盟出版部、1980、p. 21、を参照し、筆者がまとめた。

(7) 前掲論文(5)のp. 79、を参照し、筆者がまとめた。

(8) 新島襄（1843-1890）は安中藩の藩士であったが、21歳の時、1864年（元治元年）6月14日夜、箱館よりアメリカ商船ベルリン号に単身で乗り込み、故郷を振り捨てて脱藩し、密航に踏み切っている。ベルリン号は7月1日上海に着いたが、積み荷のため長崎に引き返さなければならなかったため、ベルリン号のセイヴォー船長のはからいで、アメリカ商船のワイルド・ローヴァー号に移乗した。箱館を出航してから1年1ヶ月後の1865年（慶応元年）7月20日、ボストンに入港する。渡米して新島は、フィリップスアカデミーという全寮制の高校に入学し、英語科に属した。1867年（慶応3年）には、アンドーヴァー神学校附属教会で洗礼を受けている。1870年（明治3年）7月にはアーモスト大学の理学部を卒業し、2ヶ月後の9月、アンドーヴァー神学校へ入学した。1874年（明治7年）7月には神学校を卒業し、9月24日にボストンのマウント・

ヴァーノン教会で按手礼（聖職任命の儀式）を受けている。1874年10月31日に新島は横浜に帰着するが、当時アメリカン・ボードの宣教師たちは、日本人の伝道者を養成する学校を開設したがっており、新島もこれに同調し、キリスト教と近代科学を併せて教える学校を設立することを切望した。その後、京都府知事顧問山本覚馬やJ. D. デイヴィスらの協力を得て1875年（明治8年）11月29日、難産のすえ、同志社英学校が京都に開設された。開校時の生徒はわずかに8人であったが、その8人に加えて1877年（明治10年）には、今治教会の初代牧師となった伊勢（横井）時雄が入学している。なお新島は1876年（明治9年）にはデイヴィスの司式でキリスト教の結婚式を挙げ、山本覚馬の妹、八重を生涯の伴侶としている。八重は会津藩士の娘として戊辰戦争にも従軍している。

(9) 前掲論文(5)のp. 84、によると、アッキンソンの長女メイは、神戸に到着して間もなく、脳脊髄炎のため急逝し、3歳6ヶ月の生涯を閉じている。

(10) 同pp. 82-83、を参照し、筆者がまとめた。

ツ事アルベカラズ、双方ノ人民互ニ宗旨ニ付テノ論争アルベカラズ」という条項が規定されており、相互の信教の自由を認めようとする態度が表明されていた。しかしながら、依然国内における切支丹禁制の法は厳しく、もとより公然たる活動はできなかつた。続く、明治政府も切支丹邪宗門禁制の高札をたててこれを厳しく取り締まった。この高札が撤去されるに至ったのは、ようやく1873年(明治6年)2月24日のことである。この年には太陽暦が採用され、日曜日の休暇が制定されるなど社会制度も近代化されてくるが、高札撤去といっても、宣教師とその妻の存在を黙認する程度であり、一般民衆のキリスト教に対する猜疑心も強く、伝道はなお困難であった。グリーンは、1869年(明治2年)に來日して、まだ宣教師のいなかった神戸の地を伝道の拠点として選んだことは前述したが、この地は東京、横浜方面に比して伝道を行うことがより一層困難であった。東京方面では漢訳聖書の売れ行きも盛んであったが、関西では居留地の外国人に宣教するほか、英語学校を開いて機会を見ながら聖書の教えを説くという方法をとらねばならなかつた。こうしたなかで、デイヴィスやアッキンソンも共に活動し、先に述べたように1874年(明治7年)神戸教会が11名の受洗者によって設立される。グリーンが仮牧師で、間もなく彼が聖書翻訳のために横浜に移るとデイヴィスが担当し、さらにデイヴィスが翌1875年同志社に移ったのち、アッキンソンが1880年(明

治13年)まで仮牧師に就任している。仮牧師といっても按手札を受けた日本人がいなかつたためであり、ほかに正牧師がいるわけでもなく、またそのあてもなかつたため主任牧師と何らかわらなかつたと考えられる⁽¹¹⁾。

(4) J. L. アッキンソンの四国伝道

アッキンソンが今治の地を訪れたのは神戸教会の仮牧師をしていたときである。事の由来は、1876年(明治9年)の春、松山在住の黒田進と菱田中行⁽¹²⁾の2人の求道者から神戸教会に対して松山への伝道の依頼状が届いた事に始まる。彼ら両名は、神戸教会設立者の一人である前田泰一⁽¹³⁾と慶應義塾の同窓であり、前田を介して神戸教会に依頼状が送られたことが推測される。神戸教会がこの件を審議した結果、誰も行く者がいないということを知り、アッキンソンは自ら松山への伝道を願ひ出た。彼にとっても伝道の招聘は初めての経験であったため、協力してくれる同行者を求めて神戸教会にはかかったところ教会員は躊躇したが、討論のうへ、鈴木清、小野俊二の2名が同行することになった。神戸教会は小さな教会ではあったが、2名の旅費は教会が負担している。当時、外国人が居留地を離れて国内旅行する場合には旅券の取得が必要であったため、政府に対して2ヶ月間の旅券を申請し、発行されたが、それとほぼ同時に、いくつかの障害⁽¹⁴⁾が起きた

(11) 飯峯明「今治教会創成期の人々」日本キリスト教団今治教会『創立130周年記念誌』原田印刷社、2009、p. 101、を参照し、筆者がまとめた。

(12) 高尾哲「J. L. アトキンソン博士の四国伝道」『松山東雲短期大学研究論集 第18巻』松山東雲短期大学、1987、p. 8、を参照した。また、筆者の調べによると、菱田は今治教会の初代牧師、伊勢(横井)時雄から1883年(明治16年)に受洗している。

(13) 同pp. 19-20、を参照し、筆者がまとめたところによると、前田は三田藩からの内地留学生として黒田、菱田とともに慶應義塾に学び、友人となっているが、3人とも卒業には至っていない。前田は三田(兵庫県)に慶応在学1年余りで帰り、1873年の切支丹禁制の高

札撤去を契機として神戸元町で本屋を開き、D. C. グリーンの勧めで聖書販売にも関わっている。翌1874年に摂津第一基督公会(神戸教会)が誕生し、グリーンから受洗したが、教会を設立した11名のなかで彼の名は2番目に記載されている。なお、第3番目と第4番目にはアッキンソンに同行して最初の松山、今治の伝道にやって来た鈴木清と小野俊二の名がある。

(14) 高尾哲「J. L. アトキンソン博士による最初の四国伝道」『松山東雲短期大学研究論集 第14巻』松山東雲短期大学、1983、p. 10、を参照し、筆者がまとめたところによると、当時の松山でもキリスト教の布教活動に対して、神官や僧侶による妨害や反対運動があった。

ことを告げ、しばらく待機するようにという1通の手紙が松山から届いている。1ヶ月後、許可された旅行期間が日々少なくなってきたため、1876年(明治9年)3月24日(金)の夜に神戸港より愛媛県松山三津ヶ浜(現三津浜、以下三津浜と略記)行きの蒸気船に乗り、初の四国伝道の旅に出発している。そして、アッキンソン一行は翌日25日(土)夜10時頃に三津浜に到着した。ところが誰も出迎えに来ておらず、翌日の日曜日は安息日であったため、三津浜の宿屋に月曜日の27日まで留まることにし、一行を招いた黒田、菱田に到着を知らせるために手紙を書き送っている。26日(日)午後2時頃、招待者の黒田進の長兄、黒田重道しげみちからの手紙がアッキンソンのところに届いたが、その内容は「弟の黒田進が行方不明になり、それ以前からアッキンソン一行と関わり合いになることを迷惑がっていた」というものであった。小野は真相を究明するために徒歩で松山へ出かけ、得られた情報を手紙で知らせてきた。そこで判明したことは黒田は親戚会議の結果、座敷牢しげみちに閉じ込められ、菱田は家人から誅殺すると脅かされて、アッキンソン一行を迎えに行くことを禁じられていたということであった。アッキンソンと鈴木は、三津浜の宿に滞在中の26日の夕方、27日の午前には、初めての外国人だということで、見物人が押しかけたため、トラクト(伝道用パンフレット)を配り、伝道講話を行っている。一方でその間、地元の神官や僧侶らと信仰論争が繰り返されている。また、27日(月)には松山に行っていた小野からの情報で、

日本人のキリスト信者に出会い、彼⁽¹⁵⁾の斡旋で、説教会場が確保できることが分かり、これ以上三津浜にいても仕方がないので翌日28日に松山に乗り込むことを決心する。こうして、3月28日(火)午後3時に四国最初の公の伝道集会在アッキンソン、鈴木、小野の3名によって官吏15名と数人の婦人を対象に、松山三番町の城戸屋旅館で30分間行われた。「これが四国における最初のキリスト教の解禁である⁽¹⁶⁾」。この日から城戸屋旅館や高知屋旅館などを集会場として松山に滞在した15日間、集会場の賃借問題で集会ができなかった2日間を除いて、日に2回ずつ説教を行う他、朝夕は訪問をして、『七一雑報』⁽¹⁷⁾や1,000部のトラクトを配布し、あらかじめ準備していた聖書100冊もすべて完売している。集会へは多いときには400名の来聴者があったが、なかにはアッキンソンの目に触れることを避けて、脇部屋で引戸の障子越しに説教を聴く者もあった。聴衆の大方は士族であり⁽¹⁸⁾、学生や官吏もおり、僧侶や子どもも交じっていた。なお、松山へは、アッキンソン一行の来松がかなり評判になっていること、また、中央政府よりアッキンソンらの安全を保障するようにと、当時の愛媛権令⁽¹⁹⁾岩村高俊宛の要望がきていることを知ってから出かけたようである⁽²⁰⁾。アッキンソンが四国伝道の状況を報告するため1876年4月26日付で「四国伝道記」として神戸から米国のアメリカン・ボード幹事クラーク博士に宛てた手紙のなかでも、「松山滞在中は、何の妨害もなく、その兆しありませんでした。県令(正

(15) 前掲論文(12)のP.8、において、高尾氏は、この人物を梅本町公会(現日本基督教団大阪教会)の設立発起人の一人、杉山重義であると指摘している。

(16) 同P.8、において、高尾氏はこのように指摘しており、筆者もこれに同意する。

(17) 1875年(明治8年)12月27日に神戸山手通り6丁目1番にあった雑報社から創刊された日本最初のキリスト教週刊新聞でアッキンソンの後、神戸にやって来たアメリカン・ボード宣教師O.H.ギューリック(Orramel Hinckley Gulick)が発行に尽力した。七日に一回発行される雑多な情報という意味で名付けられた新聞。1883年(明治16年)6月26日付の25号をもって終刊とな

り、以後『福音新報』と改題し、大阪から発行された。

(18) 愛媛県『愛媛県史 資料編 学問・宗教』関印刷、1983、p.909、にはアッキンソンが米国のアメリカン・ボード幹事N.G.クラーク(Nathaniel George Clark)博士に送った1877年の神戸ミッションステーションの年次報告書が英文で載せられている。このなかで集会に参加した聴衆の多くは士族であったということが報告されている。

(19) 県令に次ぐ県の地方長官。その後、岩村高俊は1878年(明治11年)初代の愛媛県令に就任している。

(20) 愛媛県『愛媛県史 学問・宗教』関印刷、1985、p.825、を参照し、筆者がまとめた。

しくは権令)は我々の主義に対して好意的で、プロテスタント流のキリスト教の宣教の経験が試みられるのを熱心に見ようとしていたように思います。兎に角、彼(岩村高俊)が松山の色々な官吏たちに、我々に対してどんな援助でも出来ることをするように命じていたと知らされた⁽²¹⁾と記している。実際に、アッキンソンは岩村のもとを訪れ、神戸、大阪、京都で自分たちがどのような役割を果たしているか、また七一雑報の記事内容について談笑しており、松山を發つ最終日(4月12日)の朝には感謝の意を述べた手紙と、ひと山のパンのプレゼントを岩村に贈っている⁽²²⁾。

こうしたなかで、アッキンソン一行が松山で伝道活動を行うために宿泊していたその旅館に、たまたま商用で松山を訪れていた今治の増田精平^{ますだ せいへい}が同宿していた。彼は事業の関係で度々松山へ往復したのであるが、アッキンソンらの説教に触れ感心し、帰路今治に立ち寄ることを乞うた。そこで

より詳しくキリスト教について学びたいと申し出てきた数名の松山の人たちに教えを授けるために、小野のみを松山に残し(小野は行動を別にし4月22日に神戸に戻っている)、4月12日(水)朝、アッキンソンは鈴木^{えい}を連れ、増田精平の重松榮順^{じゅん}⁽²³⁾ 医師への紹介状を携え松山を發ち、夕刻、海路



写真2 増田精平

日本キリスト教団今治教会『今治教會史録』2004, p.317

今治に到着した。一行2名はその夜、重松医師に接待を受け、他の世話人たちと翌日からの集会についての打ち合わせを行った。そこでアッキンソンは、世話人たちに「集会のためにはどれくらいの時間が必要ですか」と尋ねられた。アッキンソンは遠慮がちに、「約1時間半必要です」と答えた。「1人が1時間半ですか」と聞き返したので、「いいえ全体です」と答えた。すると驚いたことに、「それではあまりにも時間が少なすぎます。どうぞ少なくとも1人1時間は取って下さい!」と要求されている。今治の人々は予想していた以上の熱意と好奇心を持っているとアッキンソンたちは感じたようである。その晩は、風早町^{かざはや}1丁目の旅館、山崎屋に宿をとり、翌日から4日間、各所に赴いて今治での伝道活動に入っている。

13日(木)の夜には宿舎としていた山崎屋で伝道集会が行われ、200人収容できる宿屋が超満員となり、庭先まで人が溢れたほどであった。14日(金)夜は会場を山崎屋より柳瀬義富^{やなせ}⁽²⁴⁾ 邸に移し、4部屋の襖を取り払って1つにし、400名が集会に詰めかけている。15日(土)の日中は、小学校の校舎を借り、700名の聴衆が新しい教えに熱心に耳を傾け、夕方には、重松榮順医師の家で婦人のための集会を開いている。16日(日)の朝には350名の聴衆が集まり、午後、700名の集会を行っている。夕方には、波止浜^{かまたひでお}の鎌田秀夫⁽²⁵⁾ 医師宅で婦人集会を行っている。かくして、4日間で延べ約2,500名、戸数2,000足らずの約7,000名の今治の人口の3分の1の人たちがアッキンソンの話を聞いたこ

(21) 前掲論文(14)のp.5, を参照し、筆者がまとめた。
 (22) 同p.10, によると、その一方で、日本人庶民が官許という中央政府や地方長官の威光に非常に弱いところがあり、これによって伝道活動を円滑に進められたことがアッキンソンにとっては驚きであった、としている。
 (23) 前掲論文(12)のpp.10-11, には重松榮順が増田精平から紹介状を託された理由が述べられている。これを参照し、筆者がまとめたところによると、重松榮順はもと今治藩医であったが、重松にキリスト教思想を紹介したのが、前神^{まへのかみ}醇^{じゅん}一^{いち}である。前神は初期の大阪梅本町公会の信者であったが、もともと今治藩医、前

神大眠^{がみだいまん}の養子で彼自身も岡山、長崎、大坂に医学修行に行っていることから、重松榮順は彼から新知識を学び、そのなかでキリスト教の話聞き、関心を寄せたと考えられる。アッキンソンが今治を訪れた時、重松は娘をいち早く1875年に設立されたばかりの神戸ホームに遊学させていた(その後、神戸ホームは1879年(明治12年)に神戸英和女学校として発展し、1894年(明治27年)には神戸女学院と改称する)。したがって、重松はアッキンソンが神戸教会の仮牧師であったことは当然知っていたと考えられる。また重松はのちに今治で結成される愛隣社の中心人物でもあった。

とになる。このとき今治の聴衆にむけて配布されたと考えられるトラクトと同様のものとして、1878年(明治11年)に米國遣傳教使事務局によって作成された『^{まこと}眞の道を知る^{ちかみち}近路』の実物が手元にあるが、これをみてみると、「人間は誰しも罪を犯すものであるが、キリスト教の神を信仰すれば、罪が許される。キリスト教の神のみが眞の神である。」ということが強調して説かれている。

17日(月)の朝、アッキンソンと鈴木は4日間にわたる充実した今治での伝道活動に心を残し、別れを告げに来た前神大眠老医師と名残を惜しみつつ、陸路、多度津へ向かっている。この時、今治の人々は町を離れること10余町もの間(現在の今治市の最東端、桜井辺りまでと推測できる)見送りに来て、是非再び今治に来て下さいと声を合わせて叫んだという。また、滞在中使用された集会場の借用料は今治の人々によって支払われていたようである。先にも紹介した1876年4月26日付のアメリカン・ボード幹事クラーク博士に宛てた手紙「四国伝道記」では、アッキンソンにとって今治での滞在は大変喜ばしい成果を得ることができ、聴衆は彼の期待をはるかに超えて熱心に話に聞き入っていたと報告されている。また、今治に入った最初の外国人であるので、聴衆がたくさん集まったのは、物珍らしさが手伝っていたと分析

しているが、彼は三津浜到着から松山、今治と四国滞在中は一言も自国語を話さず、日本語で説教を行ったとも報告している。この報告書の最後には「私の印象ではキリスト教教会が今治にも近い将来に必ず設立されるであろう⁽²⁶⁾」と記されている。18日(火)には琴平神社を訪ね、丸亀の城下町でトラクトを配り、夜、多度津から出航し、神戸に向かっている。アッキンソンと鈴木の旅券が28日ぶりに切れた翌日の20日(木)に神戸に帰着している⁽²⁷⁾。

今治伝道での初日、13日の集会には当時12歳の少年であった飯^い忠^{ちゆう}太^{たろう}郎(当時の名は岩^{いわ}吉^{きち})の姿があった。彼は家業の船便の案内に宿屋廻りをしていたときに山崎屋での集会を知り、好奇心から覗きに行った。夜であったため講師の前の机の上に蠟燭が1本片側を^{おお}蔽^{おほ}われて立っているだけで、講師の側はこの蠟燭の明かりで顔を照らされているが、聴衆の側は真っ暗でお互いの顔も判別できない。物珍しさと多数の人が参加していたが、小さい町のことであるから誰が参加していたかが明らかになることを恐れたのであろうし、講師側にもその配慮があったと考えられる。忠太郎は部屋に入らず障子の外から指に唾をつけて穴をあけ様子を見ていた。とくに話のあとで宣教師が祈祷をし、聴衆が眼をつぶっている隙に灰を蒔き、その

(24) 柳瀬義富(1830-1914)は、今治における殖産興業の最大功労者と称されている。1886年(明治19年)興修舎(のち興業舎)を起こし、代表者に実弟、矢野節太の長男、七三郎を据えたが、1889年(明治22年)七三郎が亡くなったために、自らが事業を継ぎ興業舎の舎主となる。経営の近代化につとめ、伊予綿ネルを西日本屈指の繊維産業に育てあげた。やがてその技術はタオル、染色、縫製などの繊維関連産業に活かされ、後世の「繊維産業の町今治」の地位を不動のものとした。彼は熱心なキリスト信者でもあり、今治教会設立当初より、教会を積極的に支援した。1881年(明治14年)に入信するが、彼の入信の影響は大きく、地元有力者が相次いで入信したため、今治教会は大いに発展した。また義富の五女、豊は伊勢(横井)時雄の妻、峰子が病気で亡くなったため、後妻として伊勢のもとに嫁いでいる。今治市立図書館に隣接する鷺ノ町公園

の敷地内には彼の今治繊維業における功績を称え人物像が建立されている。なお、柳瀬義富の功績については、阿部克行氏の著した「柳瀬義富と興業舎」『今治人物回廊』2001, pp. 102-117, に詳しいので参照にされたい。

(25) 前掲論文(12)のp. 20, には「鎌田秀夫は、波止浜で医院を開業していたが、自宅を開放して伝道集会を開き、波止浜教会の設立者でもある。」の記述がある。筆者の調べによると、波止浜教会は1888年(明治21年)に設立されたが、1940年(昭和15年)今治教会に合併し同会の伝道所となる。波止浜教会堂は1994年(平成6年)に老朽化のため取り壊され、現在会堂は存在しない。

(26) 前掲論文(14)のp. 8, から引用した。

(27) アッキンソンは神戸への帰途、四国最大の都市である高松にも伝道に行こうとしたが、旅券の期限がせまっていたために断念したようである。

灰をかぶると信者になることから逃れられないという噂があったので、その時は殊更眼を開いて見ていたという⁽²⁸⁾。この飯忠太郎は後年、父忠七とともに港町今治の発展のために多大なる功績を残すことになる。

1876年4月の最初の今治伝道以降も、アッキンソンは1876年(明治9年)冬と、翌年の1877年(明治10年)5月には同志社英学校神学生の小崎弘道⁽²⁹⁾と横山(二階堂)圓造⁽³⁰⁾を伴い来今し、この時には求道者が多数起こり、受洗志願者も2名あった。つづいて、1878年(明治11年)の4月と12月、1879年(明治12年)の4月と9月[今治教会設立式]、1880年(明治13年)の4月と11月、1881年(明治14年)7月[今治教会献堂式]、1884年(明治17年)3月[小松教会献堂式]と、ほぼ毎年のように今治を訪れている。これ以降も3回のアッキンソン来今の記録はあるが、今治教会が自立するようになってからは当然来訪の機会は少なくなっている。最後の来訪は、1894年(明治27年)11月10日(土)からの数日間であり、これは組合教会の四国部会(部会の所属教会は、高松教会、小松教会、波止浜教会、今治教会、松山教会の5教会であった)が開かれた時である。明治の時代も20年代に入ると、日本の国力が増大するにつれて反動的に国粹主義や排外思想が強くなっていき、外国人の説教や講演を好まなくなった風潮から伝道旅行もできなくなっていった。アッキンソンは神戸在住の外国人たちのプロテスタント合同教会であるユニオン・チャーチ⁽³¹⁾の牧師をしつ

つ、伝道が思うようにできなくなつてからは、論陣をはるために『旭光』という月刊誌を発行し、1895年(明治28年)から1908年(明治41年)の永眠までその主任者として、効果的に多くの日本人に説教することに努めた。日本での開拓時代の伝道には様々な困難があり、迫害も強かつたようである。外国人保護という名目で刑事が尾行し、またアッキンソンを殺害しようとした人々もいた。彼自身が感づいてただけで3度あったという⁽³²⁾。こうして、グーンサー夫人の1906年(明治39年)4月18日に遅れること2年の1908年(明治41年)2月17日に横浜で天に召されている。享年66歳であった。

1878年(明治11年)4月のアッキンソン4回目の訪問に同行して初めて来今した女性宣教師にJ.E.ダッドレーがいた。彼女は当時のキリスト教思想を吸収しようとしていた今治の人々にとって忘れられない存在であったようである。アッキンソンが今治教会の父であるとすれば、ダッドレー女史はまさに慈母であり、今治の人々から「ダッレーさん」と呼ばれ深く敬慕されている。J.E.ダッドレー(Julia Elizabeth Duddley, 1840-1906)女史は米国イリノイ州の出身で、幼くして父親を失い、母親を助けて学校



写真3 J.E.ダッドレー
今治近代産業史顕彰委員会『商工都市いまばりの夜明け』2009, p.37

(28) 前掲書(11)のp.102, を参照し、筆者がまとめた。

(29) 小崎は伊勢(横井)時雄と同じく熊本バンドの一員であり、今治教会最初の牧師となった時雄とともに1879年(明治12年)6月の同志社英学校第1回卒業生15名のうちの1人でもある。東京赤坂に靈南坂教会を創設し、同志社第2代社長も務めた。海老名弾正、宮川経輝と共に「組合教会の三元老」と呼ばれた。1877年5月の伝道において中国、四国地方を精力的に廻ったが、同志社卒業と同時に時雄が今治教会に赴任したのも、小崎から口添えがあったものと推測される。

(30) 横山(二階堂)はその夏1ヶ月間今治に滞在し、伝道にあたっている。つまり、横山は今治の夏季伝道師

第1号ということになる。彼は1875年(明治8年)11月29日に同志社英学校が開校されたときの最初の入学生8名のうちの1人でもある。

(31) 日本基督教団神戸教会『近代日本と神戸教会』創元社, 1992, p.21, を参照し、筆者がまとめたところによると、ユニオン・チャーチは1872年(明治5年)にD.C.グリーンによって神戸居留地に創設されたプロテスタントの外国人教会である。居留地には他に1870年(明治3年)にP.ムニークによって創設されたカトリックの神戸天主堂があった。

(32) 前掲書(11)のp.103, を参照し、筆者がまとめた。

教師をしていたが、母の永眠後、アメリカン・ボード派遣の最初の婦人宣教師としてE.タルカット (Eliza Talcott, 1836-1911) 女史とともに、アッキンソン夫妻に先立つこと半年、1873年(明治6年)3月1日に来日している。33歳の時のことである。神戸に居を構えた2名の婦人は伝道の傍ら、1875年(明治8年)に私塾女学校(神戸ホーム)を開校し子女に英語を教えていたが、生徒数が増加し、ついに1879年(明治12年)神戸英和女学校を創設した。これが現在の神戸女学院の前身である。のち神戸女子神学校(現聖和大学)を創設したタルカット女史とともに神学教育にも献身している。ダッドレー女史は、今治教会設立直後の1879年(明治12年)10月にも来今しており、特にこの時には婦人の集會に力を注ぎ、その結果、同年の12月に行われた第2回の洗礼式には中谷イワヲ、眞鍋ヒデ、の二女子が受洗しており、これが今治最初の婦人會員の誕生となった。また、1880年(明治13年)の4月と10月にも来今し、10月の際には新島襄と同行し、新島が2日間にわたり300余名、500余名と聴衆を集め、會堂は立錫の余地もなく道路にも人が溢れるという盛況を示せば、女史は婦人會で講演し、1週間も滞在して活動したようである。このようにダッドレー女史が今治において婦人への伝道に果たした役割は大きく、彼女は1900年(明治33年)病気のため帰国し、6年後永眠しているが、この時今治教会は女史の追悼集會を開き哀悼の意を表している。女史が天に召されたのもアッキンソンと同じく66歳のことである⁽³³⁾。

ダッドレー女史の最初の来今は、アッキンソンの4回目の訪問に同行したことにあったが、この時はバロス女史のほか、山田良斉、鈴木清も一緒であった。そして新設の發英小学校⁽³⁴⁾で説教をすると同時に、アッキンソン、ダッドレー女史の肝入りで「愛隣社」という教会の外郭団体が結成されることになり、今治教会設立への機運も高まっていく。

(5) 黎明期の今治教会の人々

“神を愛し、隣人を愛そう”という目的で1878年(明治11年)5月に柳瀬春次郎、増田精平、山田又助ら30数人で結成された愛隣社は、定期集會を持って伝道活動に励んだが、まだ求道者の団体にすぎなかった。

1878年(明治11年)1月、浪花教会牧師の沢山保羅⁽³⁵⁾の提案によって神戸、三田、兵庫、多聞、大阪、浪花、京都第一、京都第二、京都第三の9教会の會員18名が創立開校直前の梅花女学校に集まって、日本基督教伝道會社を組織する。このとき新島襄、沢山保羅、今村謙吉が委員に選ばれ、この夏は主として同志社の神學生を各地に伝道派遣することに決定している⁽³⁶⁾。今治には6月中旬より2ヶ月間、赤峰瀬一郎が派遣され、いわゆる“夏季伝道”にあたった。この年の5月にはすでに愛隣社が結成されており、赤峰は風早町の山田氏宅に泊まり、日曜・水曜ごとに説教(伝道講話)、火曜・木曜に読會(聖書研究)、金曜に祈禱會を催している⁽³⁷⁾。参加していた20余名の人々

(33) 同p. 103. を参照し、筆者がまとめた。

(34) 前掲書(2)のp. 306. によると、この小学校は旧本町町會所を使用して1874年(明治7年)に創立され、恵美須町の辰ノ口寄りにあったと推測される。

(35) 沢山保羅(1852-1887)、保羅は使徒パウロに由来し、本名は馬之進。日本で按手札を受けた最初の牧師である。長州藩士で奇兵隊にも参加したが、とくに陽明学を三原藩、今治藩でも学び、今治では藩校、克明館に修学した。その後、摂津第一基督公會でアメリカン・ボードの宣教師D. C. グリーンに英語を学び、キリスト教信仰にも目覚める。1872年(明治5年)には

グリーンの推薦で米国へ留学し、アメリカの會衆派教會で受洗する。帰国後、長州藩出身の秀才で知られた沢山は直ちに明治藩閥政府から仕官を求められたが、150円の俸給を蹴って僅か6円の浪花教會の牧師となり、教會費自給による運営に取り組み、日本組合教會の基盤を作った。伝道活動を行う一方で女子教育にも携わり、1878年(明治11年)には同郷の後輩、成瀬仁藏の協力を得て梅花女学校を設立。肺結核のため、34歳で亡くなっている。

(36) 前掲書(6)のp. 225. を参照し、筆者がまとめた。

(37) 前掲書(11)のp. 104. を参照し、筆者がまとめた。

は全集会に無欠席であったが、この中から眞鍋定造が伝道献身の決意をして赤峰を追って同年、1878年の9月に京都に赴き同志社入学を果たすことになる。従って、眞鍋定造が今治教会出身の伝道者第1号ということになる。

眞鍋定造（1856-1891）

は安政3年の生まれで、1879年（明治12年）9月の今治教会設立の時には22歳の同志社の学生であったが、今治に帰郷して受洗している。彼は教会員中最年少であったが、それでも牧師の伊勢（横井）時雄よりは1歳年長であった。勉学の傍ら伝道に専念し、そのため正規の修学証を受けるのは横山（二階堂）圓造などと同期の1885年（明治18年）となっている。1880年（明治13年）9月には今治から同志社英学校、神戸英和女学校への入学者数名を同伴し、それぞれ学校へ送り届けるが、その帰途、いわゆる和合丸事件⁽³⁸⁾に遭遇し、船が大破し危うく助かったが、それ以後胸部疾患に悩まされることになる。1883年（明治16年）末までは今治とその周辺（島嶼部・波止浜・小松・松山⁽³⁹⁾）などで活躍し、ついで岡山笠岡に定住伝道師となり、同地方を巡回伝道している。その甲斐あって1884年（明治17年）3月には笠岡教会が

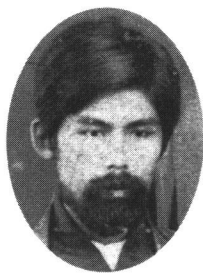


写真4 眞鍋定造

日本キリスト教団今治教会『今治教會史録』2004、巻頭より

設立され、定造は1886年（明治19年）までこの地の仮牧師をしている。笠岡は1877年（明治10年）にアッキンソンがはじめて伝道したところで、また今治教会員の藤田福松が滞在して信徒の養成に尽力した地でもある。定造は1886年（明治19年）3月の今治教会伊勢（横井）時雄牧師の辞任後、今治に帰郷して教会を助けるが、その後兵庫県の竜野で伝道にあたる。しかし病気が悪化し、1889年（明治22年）には辞任して上京する。この時たまたま療養中の新島襄が大磯で病が篤くなると同地に駆けつけて、その死に至るまで看病にあっている。新島は1890年（明治23年）1月23日に昇天している。定造は極めて弁舌に秀でていたが、その信仰・才能・人柄によって新島から同志社在学中より特に愛顧せられ、新島の講演旅行には、しばしば随行するほどであった。しかし、その彼も新島が亡くなった翌年、1891年（明治24年）8月11日に36歳の生涯を全うしている。定造は病を抱えながらも、伝道活動さらには学問にも励み、晩年にはわが国最初のコンコルダンス（聖書語句索引辞典）となる『聖書語類』を1890年（明治23年）2月に編纂刊行している。この『聖書語類』の編纂と並行して、1886年（明治19年）11月27日に創刊された総合的児童雑誌『ちゑのあけぼの』の編集者も務めている。近代日本において、はじめて全国的に流布した総合的児童雑誌『少年園』の登場が1888年（明治21年）であったことを

(38) 柿本真代「初期同志社英学校に学んだ眞鍋定造の軌跡」『新島研究 第102号』同志社大学同志社社史資料センター、2011、P.118、を参照し、筆者がまとめたところによると、定造が今治に戻るために選んだのは和合丸という汽船であった。この和合丸は大阪川口波止場より出航し、多度津、今治、三津浜、上関、三田尻に寄港する汽船であった。定造が和合丸に乗り込んだ9月15日の深夜、四国・近畿地方に台風が上陸した。和合丸は9月15日の午後、大阪川口を出航したが、神戸和田岬付近で天候の異変を感じ、和田岬の灯台付近で錨を下ろし、停泊することにした。その数時間後の午前3時頃、淡路島の岩屋港へと航海を再開したところ、突如突風に襲われ、暗礁に乗り上げ船は大破している。事故当時、「乗客159人中63人が溺死した」と

伝えられたり、「80人の屍が陸に上がった」と報じられるほどの大惨事であった。定造は運良く淡路島に漂着し、かろうじて一命を取り留め、その数日後、三津浜からの汽船竜丸に迎えられ、今治へ帰ることができた。『今治教會史録』に掲載されている『今治基督教会沿革小史』によると、同年、10月1日には難を逃れた定造に対する感謝会が信徒100余名が集い、今治吹揚公園にて催されている。

(39) 松山教会の設立は1885年（明治18年）1月28日。小松教会の設立は1885年（明治18年）2月1日。波止浜教会の設立は1888年（明治21年）7月1日である。なお、小松教会については、教会設立式に先立って前年の1884年（明治17年）3月11日に教会献堂式が行われている。

考えると、この『ちゑのあけぼの』は児童文化の先駆的役割を果たした存在として刮目に値する。また、子ども向けの洋風楽譜付き唱歌集『幼稚唱歌集』を1887年(明治20年)3月に編集出版している。当時は唱歌教育用の楽譜入りの教則本がなかったために文部省によって選ばれた指導者が口伝えに聴いて、それを児童に伝えていたため、正確な音楽教育がなされていないと感じた定造は唱歌集の編集に着手したようである。政府の音楽取調掛編の『幼稚園唱歌集』が9ヶ月遅れの1887年12月に出版されているが、歌の内容が非常に類似しているものが多くみられ、その点が大変興味深い。

ところで、今治教会設立以前にすでに今治出身の基督教徒が存在した。前神醇一と八木治作の2名であり、1874年(明治7年)に設立された梅本町公会(現日本基督教団大阪教会、以下大阪教会と略記)でその後同時に受洗している。1879年(明治12年)春に両名とも一度今治に帰省し、愛隣社を助けて伝道にあたっている。こうしたなか同年1879年の3月6日、大阪教会の仮牧師、上代知新かじらともよしが来今する。これには大阪教会員であった前神、八木の働きかけがあったと考えられる。上代は約10日間今治に滞在し熱心に教えを説いたが、集会が愛隣社員の自宅でなされるのが常であるため、常設集会場の必要を力説し、衆議一決、1879年(明治12年)3月16日、米屋町1丁目に会堂を設立することになった。会堂といっても陰気な借家で

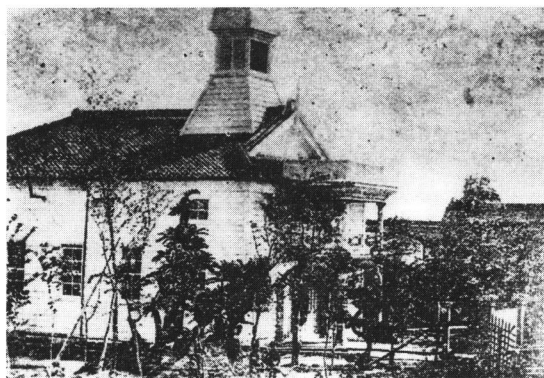


写真5 初期の今治教会(風早町)

今治史談会『ふるさとの思い出 写真集 今治』1980, p.19

あった。上代は翌17日に今治を去って松山に向かうが、彼は1882年(明治15年)1月から4月まで今治教会の伝道師としても活躍している。こうして教会組織設立の機運が高まり、初めての会堂が設立された同じ年、1879年の9月21日(日)には今治教会設立式が執り行われ、午前9時より6名(全員男性)にアッキンソンが洗礼を授け(この6名に加え前出の八木治作は大阪教会から転籍し、今治教会員となっている)、聖餐式を行い、午後3時より横山(二階堂)圓造、上代知新の演説、夜はアッキンソンと新島襄の演説が行われている。これをもって“四国最初のプロテスタントキリスト教会”今治教会の誕生となる。米屋町の会堂は1年間続き、1880年(明治13年)2月には陽当たりの良い風早町1丁目の借家に引越し、さらに1年後には本会堂建築の議がすすみ、恵美須町に新会堂が建立され1881年(明治14年)7月3日(日)、アッキンソン、新島襄夫妻、タルカットらを招き、今治教会献堂式が挙行されている⁽⁴⁰⁾。この今治教会堂は、1878年(明治11年)に建てられた神戸教会の会堂をモデルにしたものであった。「教会堂が建築されるに至った直接の契機は、アッキン

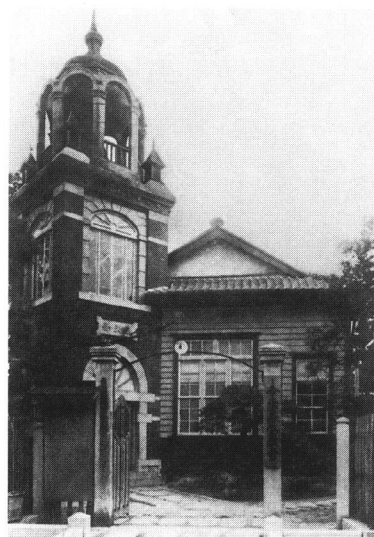


写真6 初期の今治教会(恵美須町)

赤煉瓦の鐘楼があるので1909年以降のものであると考える。今治近代産業史顕彰委員会『商工都市いまばりの夜明け』2009, p.4

ソンの日曜夜の説教を酔っ払いの神道の狂信家が妨害したことと、風早町の借家の持ち主が神道の信者で、教会に明け渡しを要求したことにある⁽⁴¹⁾。なお、恵美須町に建築された教会堂は、第二次大戦中の1945年(昭和20年)8月5日から6日に及んだ今治空襲によって焼失し、1949年(昭和24年)に場所を移転して南宝来町1丁目に再建され、今日に至っており、敷地内には今治めぐみ幼稚園(1951年設立)が併設されている。恵美須町の旧今治教会堂跡地にはかつてその場所に今治教会が存在していたことを伝える石碑が1972年(昭和48年)12月、教会員の人々によって建立されており、碑文は当時の今治教会牧師であった榎本保郎⁽⁴²⁾によるものである。

(6) 伊勢(横井)時雄の今治伝道

1879年(明治12年)3月、米屋町1丁目に仮会堂ができて常時集會が行われるようになってくると、当然、指導者が必要となってきた。そのため同志社にあった眞鍋定造の人選によって同じ同志

社で学んでいた先輩、伊勢(横井)時雄(1857-1927)⁽⁴³⁾が来今することになる。1879年4月のことであり、八木治作と峰谷芳太郎^{はちやよしとろう}が大坂まで迎えに向かっている。その時の影響感化には大きいものがあつたとみえ、今治の人々の要望に応じて同年、1879年6月、第1回の同志社卒業生となった時雄は6月20日頃今治に再来することとなる。時雄が21歳の時のことである。彼は卒業後、自分の生誕地である熊本に伝道師として赴任するつもりであったが、愛隣社の人々の持つ信仰の深さと、情熱の厚さに押されたようである。4月に伝道して、京都の同志社に帰る際、大工の大倉治衛門^{おおくらしゑもん}は別れの挨拶に来た時雄に鋸屑を払いながら「あなたは迷える子羊を放っておくつもりですか」と一種の脅迫をなし、郷里の九州への伝道を志していたであろう時雄に再来の約束をせしめた。



写真7 伊勢(横井)時雄
日本キリスト教団今治教会『今治教會史録』
2004, p.5

(40) 前掲書(11)のp. 105, を参照し、筆者がまとめた。
(41) 前掲論文(12)のp. 11, において、高尾氏は教会堂が建築されることになった契機をこのように著しているが、筆者の調べによると、その中の「アッキンソンの日曜夜の説教」というのは、1880年(明治13年)11月7日(日)の説教であると比定できる。『愛媛県史 資料編 学問・宗教』1983, pp. 909-913, にはアッキンソンが米国のアメリカン・ボード幹事クラーク博士に宛てた1880年12月20日付の書簡が英文で載せられているが、この中で神道の狂信家との一件が記されており、すでに今治教会の牧師として働いている伊勢(横井)時雄やJ. D. デイヴィスの名もでてくる。アッキンソンの四国への伝道の記録(前掲論文(12)のp. 17)と照合してみると、伊勢が今治教会牧師になったのは、1879年9月であり狂信家との一件はそれ以降のことでありと考えられ、また、デイヴィスとともにアッキンソンが来今しているのは、1880年11月5日(金)から9日(火)であることから判断できる。教会員たちは、真に信仰を深め、説教を行うためには、間借りの借家では不完全であると考えたのではないだろうか。
(42) 榎本保郎(1925-1977)は、9代目牧師として1963年(昭和38年)から1975年(昭和50年)まで今治に在

職した。1969年から、祈りの集い「今治アシラム」を開催している。1975年に今治教会を辞してアシラム運動に専心し、日本各地、台湾、米国の日系教会へと運動の輪を広げた。彼については、三浦綾子『ちいろば先生物語』朝日新聞社、1987, に詳しいので参照にされたい。
(43) 伊勢(横井)時雄(1857-1927)は、幕末の思想家、横井小楠の長男である。小楠は明治新政府に登用されたが、1869年(明治2年)京都で旧攘夷派の浪士に暗殺された。時雄は熊本洋学校に入学し、L. L. ジェーンズ校長の感化で信仰に導かれた。1875年(明治8年)洋学校を卒業したが、翌年、熊本郊外の花岡山で同志35名と奉教趣意書に署名して、熊本バンドを結成した。時雄は上京して開成学校に学んでいたものの、熊本洋学校の閉鎖に伴って熊本バンドの仲間が同志社英学校に大挙入学したため、1877年(明治10年)同志社に転入した。新島襄校長は学力に秀でた時雄を「格別聖書クラス」に編入した。姓については、父方の従兄である伊勢左平太が父小楠の継嗣となっていたが1875年(明治8年)病没した。そのため、養嗣となって後を継いだためであるが、1889年(明治22年)横井に復姓している。

大倉については、

うちの裏の治衛門は
目も口も赤うて
築山くずして耶蘇まいて
耶蘇は御国の嫌われもん

という歌が流行した。キリスト教を受け入れられない周囲の人々は、大倉が西洋かぶれした恐ろしい男で、^{ほこら}祠を破壊し、福音の伝搬に懸命になっていることをからかっていたのである。この大倉は今治教会の最初の受洗者のうちの1人である。

愛隣社は先にも述べたように、「神の愛にこたえて神を愛し、隣人を愛そう」というアッキンソンの呼びかけで結成され、定時集会をも持つようになり、また彼ら自らも伝道に励んだが、まだ求道者の団体であり、時雄はこれを激励して教会設立にまで推し進める。しかし、30人以上もいる愛隣社の人々が受洗されるためには10日間にもわたる口述試験があり、それも信仰内容に関してだけでなく、安息日を厳守して商売を休業して、そのため生活が困難になってもよいか、その時はどうするか。妻に来てくれる者がなくてもよいか。いわゆる村八分にされてもよいか。法律が改正されキリスト教者というだけで死刑を宣告されてもよいか。などを尋ねるもので、返答に詰まれば落第ということになった。当然それによって失うものを多く持っていた旦那衆は躊躇することになる。こうした厳しい基準に到達した人々が、大倉治衛門（大工）、中谷卯三郎（石屋）、蜂谷徳三郎（小間物屋）、^{やのまんすけ}矢野萬助（米屋）、^{わたなべふくじ}渡邊福治（鍛冶屋）、真鍋定造（同志社学生）のわずか6名であり、これに加え、大阪教会より今治出身の八木治作（海渡用達）が転入会した。教会設立式兼洗礼式兼伊勢時雄の牧師接手礼式が行われたのが、1879年（明治12年）9月21日のことである。洗礼司式者はアッキンソン、接手礼司式は新島襄、聖餐式は新島、伊勢が執行した。「今治教会は、わが国における草創期のプロテスタント教会としてはめず



写真8 今治教会設立時の受洗者

後列左から蜂谷・大倉・渡邊
前列左から真鍋・中谷・矢野・八木
今治近代産業史顕彰委員会『商工都市いまばりの夜明け』
2009, p. 37

らしく町人によって創立された教会であり、その後旧士族らの入会者も続いたが、勤勉で禁欲的な町衆を中心とした教会の性格は第二次大戦まで続いた⁽⁴⁴⁾。また、この年の12月には、男子3名のほか、初めて女子の受洗者が生まれたが、1人は中谷卯三郎の母イワヲ、もう1人は真鍋ヒデであった。

この創立者7名はそれぞれ今治教会のために尽力している。このうち大倉は真鍋について明治20年代の後半に永眠し、中谷は1901年（明治34年）まで教会執事として働いたが1904年（明治37年）に病没し、渡邊を含めて7名中4名は明治時代に没する。蜂谷徳三郎⁽⁴⁵⁾（1841-1921）は教会青年から「オヤジ」として慕われ、人の面倒を良くみた勇み肌の人であったが、受洗した時はすでに39歳であり、年齢と共に益々温厚の度を加え、自宅から通りかかる人を招き入れては喫茶座談伝道にその特色を発揮し、今治の蜂谷老として全国の教会人に有名であったようである。1921年（大正10年）88歳で永眠している。矢野萬助（1848-1932）は85歳、八木は90歳を超える昭和初年に至るまでの長寿を与えられ、両名は教会の幹事、伝道委員、日曜学校幹事を歴任している。なおアッキンソン

(44) 『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988, p. 134, を引用した。

を最初に今治の地に招聘した増田精平は、創設期から愛隣社員となり、四男三女を基督教学校に学ばせたが、自らは「ノアの方舟を作った舟大工である」と称し、舟に乗り込むには罪深いと洗礼を受けようとはしなかったが、1921年(大正10年)になって46年を経て受洗し、教会員に加わっている。信仰試問が厳格であったのは、それだけの必然性があったようである。耶蘇の集会に行くというだけで勘当を迫られたり、時には親族から殺すと脅かされることもあったようである。夜間通行中に背後から木槌で殴られる者もあったし、投石されることもあったようである。特に新会堂設立時の1881年(明治14年)頃には今治地方の迫害が盛んで、吹揚神社と結んで組織された“奉弊組”

は門口に「御弊」という朱色の標札を掲げ、教会員に対する非買同盟、不買同盟を結成していた。さらに1,000人の群衆が新会堂に押しかけ投石し、教会員を殴打することもあったようである。また、大阪より松井馬琴なる講釈師が来今し、室屋町劇場などで反基督教の演説会を開いて大いに煽動している。しかし今治教会員たちはより結束を固め一致団結して、これに立ち向かったようである。また、幕末期に今治藩主の久松定法が黒住教に入信していたこともあって、家臣や庄屋それに大地主など、今治の支配者階級の立場にあった人々はほとんどが黒住教徒になっていたが、当時、盛んであった黒住教からの攻撃に対しては堂々と理論闘争⁽⁴⁶⁾をして厭わなかったようであ

(45) 蜂谷徳三郎の兄で大工職人であった吉田伊平(1836-1905年)は1881年(明治14年)恵美須町に建立された新会堂(写真6)を建設しており、自身も初期の信徒であった。日本基督教団今治教会『八十年記念誌』原商会印刷部、1959、pp.98-100、には息子の吉之助が父伊平について寄稿している。これによると、伊平は、江戸、大阪に招かれたほどの職人であったが、入信するに際し、今後、耶蘇に対しては仕事の依頼がなくなる、また職人も来てくれないと考え、居職となって家具屋に転業する。しかし、今治教会堂建築の依頼を受けたことが契機となり、生計を立てることができると確信した伊平は、各地へ教会建築請負の宣伝を開始した。伊平は安息日を厳守し、職人まで休ませ祈りを以て仕事に励んだ。その結果、今治の耶蘇の請負人吉田として各地に名が知られるようになる。今治教会建築のあと、その腕をかわれ日本各地から教会建築の依頼があり、岡山、備中高梁、倉敷天城、鳥取、函館、宮崎、松山、小松、波止浜の教会を建築し、ミッションスクールでは、岡山山陽女学校、松山女学校、神戸英和女学校などの校舎を次々と手懸け、西日本きっての教会建築者として名を轟かせた。1910年代以降には、西洋建築家ウィリアム・メレル・ヴォーリズ(近江兄弟社の創設者のひとりで「メンソレータム」を広く日本に普及させた人物でもある)によって手懸けられたプロテスタント教会が多く見られるが、初期の教会建築を日本人の職人が担っていたことは大変興味深い。なお、伊平の息子、猪之助、吉之助も父の後を継ぎ、耶蘇大工として腕を振るったが、特に吉之助は、1909年(明治42年)、教会創立30周年記念事業として鐘楼を新たに赤煉瓦様式に建て替え、父伊平が建築した今治教会堂に建て添えている。



写真9 高梁教会

<http://blogs.yahoo.co.jp/kmy22jp/33436405.html>

伊平が建築した教会のうち現存するものに日本基督教団高梁教会の教会堂がある。1889年(明治22年)の竣工で、現存する岡山県下最古の教会堂建築であり、高梁の近代建築のなかで年代の判明しているものの中でも最古のものである。岡山県指定史跡となっている。また、倉敷市にある日本基督教団天城教会の教会堂がある。1890年(明治23年)の竣工で、県内では高梁教会に次ぐ古さを誇る教会堂建築であり、岡山県指定史跡となっている。これら教会堂の建築については、おそらく今治教会と関係の深かった高梁出身の二宮邦次郎、留岡幸助らが何らかのパイプ役となって吉田を紹介したのではないかと推測される。

(46) この他にも、浄土真宗本願寺派僧侶、藤嶋了穂『耶蘇教の無道理』二篇(明治24年6月24日刊)なるパンフレットの散布など、妨害活動は熾烈を極めたが、伊勢時雄牧師は『真教辨明』三篇(明治14年刊)を発売してキリスト教は真教であると弁明し、反駁している。

る。理論闘争で敗れると反対者たちは、
わたしゃ、嫌じゃよ、耶蘇教は嫌じゃ
まるで白歯で鬼のよな。
わたしゃ好きじゃよ、耶蘇教は好きじゃ
オツと間違った大嫌い。
春の来るのは、そりゃよいけれど

耶蘇の来るのが気に入らぬ。

というような端唄^{はうた}を流行させて対抗した。これは婦人のお歯黒をつける風習を廃止し、歯を磨いた教会員たちを揶揄した低俗な非難であった。当時の民衆の生活設計ないし希望は、小金を貯めて連子格子の家に住み、妾のひとりでも置く、というようなものであったが、これに対し、時雄の薫陶を受けた教会員たちは、自分たちの信仰とそれによる倫理的生活こそが町を発展させ、ひいては日本の国を良くするものという確信に生きており、職業においても一層勤勉な態度で取り組んだ⁽⁴⁷⁾。例えば、矢野七三郎は家業の酒造業を弟に譲り、時雄より受洗し、和歌山で習得した技術で「伊予綿ネル」という織物^{しちまぶろう}を始め、今治の殖産興業を推進している。また、前出の飯忠太郎も時雄から受洗したが、家族からの反対にあって家出する。その後、許されて父親から家業の海運業を引き継ぎ、大手海運会社と代理店契約を結んで海外交易にも着手し、今治港の扱い高を飛躍的に増大させている。彼らだけではなく、その他の教会員も一人ひとりが禁欲的な職業倫理に生き、身分の分け隔てなく豊かな者も貧しい者も互いに助け合いながら、封建時代を脱して自らの信仰の結びつきによって市民社会を形成していった。

時雄の今治教会牧師としての信仰心の篤さと、伝道によせる情熱の崇高さは、アッキンソンが神戸教会から米国の母教会に送った書簡「四国伝道旅行記」⁽⁴⁸⁾の中にみることができる。1884年（明治17年）3月22日付書簡では「伊勢氏が熱心に働いていて、彼の教会（今治教会）は彼とともにあ

ります。彼らは一緒に近くの町々、村々に、そして遠くに離れた所にも出かけています。冬の間は信徒たちの罪の悔い改めや、恥や悲しみの精神が非常に顕著に見られます。涙や嘔り泣きや破れかぶれの罪の告白に満ちた祈祷会がしばしばでした。大いなる恵みがすべての人々にまさに注がれようとしている、という雰囲気がこの教会には漲^{みなぎ}っている様に見えます」と記され、同年11月22日付書簡では「私は伊勢氏と大変親しくさせてもらっています。彼は高貴で、献身的で、知的な人物であり、彼の直接の伝道地である今治よりさらにたくさんの地域に永久的な影響力を持っています。」と記されている。さらに、翌年1885年（明治18年）1月9日付書簡では、手紙の終わりに追伸として「この青年の教会（今治教会）は日本最大です。クリスマスの日の午後に子供たちのための礼拝が催されました。日曜学校のいつもの人数の2倍が出席しましたが、全員プレゼントを貰いました。夜にはあまりにも多くの聴衆が集まりましたので、教会のドアは入り口の辺りの混乱を避けるために閉ざされました。…略…。伊勢氏は熱心であるのみならず彼の教会は彼と一体です。」と記されており、いずれも時雄が献身的に教会員たちと接し、そうした時雄のもとに彼を慕って多くの人々が集っていたという様子を示しており、双方が深い絆で結ばれた今治教会の繁栄ぶりをアッキンソンは自身の感想として米国教会に報告している。今治教会は米国のアメリカン・ボードからみても日本有数の教会として捉えられていたようである。アッキンソンは先にも述べたが、今治教会設立後も、度在るごと四国を訪れ、他地域での教会設立に向け時雄や他の信徒たちと精力的に伝道活動を行っている。こうした伊勢時雄牧師の熱心な伝道と、信徒の協力の結果によって受洗者は、就任の年の1879年（明治12年）に13名、1880年（明治13年）に29名、1881年（明治14年）に39

(47) 前掲書(11)のpp. 106-107, を参照し、筆者がまとめた。

(48) 高尾哲「四国伝道旅行記（第一部）」『松山東雲女子

大学人文学部紀要 第7巻』松山東雲女子大学, 1999, pp. 45-67, を参照した。

名、1882年(明治15年)に28名、1883年(明治16年)に95名、1884年(明治17年)に198名、今治辞任の前年1885年(明治18年)に78名となっており、約7年間の在任中に478名の人々がキリストの救いを体験して今治教会員となっている⁽⁴⁹⁾。当時の教会員数は、神戸教会に次いで西日本で2番目の規模となっていた。

このような今治教会の短時日の教勢躍進ぶりに対して、1883年(明治16年)にはアイオワ州組合教会連合会より鈴鐘が寄贈され、キリスト教受容拒否のこのような社会的反響の中で、翌年の1884年(明治17年)には、遠くからもよく見える尖塔に鐘楼がつくられている。当初は今治町民の中からも鐘の取り除きを訴える声もあり、教会は大事をとり鐘を鳴らすのに予め警察に届け出たようである。徳富蘆花(健次郎)は翌年の1885年(明治18年)に従兄(時雄の父小楠の後妻がつせ子であり、この時雄の継母つせ子の姉が蘆花の母久子)の時雄のもとに身を寄せることになり今治の地を踏むが、彼は後年『黒い眼と茶色い目』のなかで、日曜の朝夕、水曜と金曜の夜毎にこの鈴鐘がよい音を奏でていたと回想している。1893年(明治26年)12月からは、今治町より小学生が登校するときの時報として鳴らすよう依頼を受け、さらには正午までも報じるようになっていったようである。今治の名物となったこの鐘は人々から「愛の贈り物」と称されていたようである。しかし、この鐘も第二次世界大戦末期が近づく中で姿をとどめることが叶わず、1942年(昭和17年)、金属回収令に基づいて強制供出を命じられ、四阪島の炉中に姿を消すこととなる。

時雄はまた、愛媛に今治教会以外にプロテスタントの教会が存在しなかったため、松山、小松、西条などから通ってくる教会信徒が数多くいるという実情を嘆き、今治を拠点として他地域への伝道にも積極的に取り組んだ。1882年(明治15年)には同志社を卒業後、郷里、高梁教会の仮牧師でもあった二宮邦次郎(1860-1926)伝道師が時雄

を助けるため今治教会にやって来る。時雄と二宮は松山や小松に精力的に伝道活動に出かけて行く。そして、1885年(明治18年)1月28日(休)には二宮伝道師を初代牧師とする接手礼式が行われ、62名の教会員をもって松山第一基督教会(現日本基督教団松山教会)が設立され、翌月の2月1日(日)には伊予小松教会が設立されることになった。また、当時は、四国に女学校が存在しておらず、神戸英和女学校に行かなければならなかったため、二宮は翌年の1886年(明治19年)9月に私立松山女学校(現松山東雲学園)を設立した。創設当時の生徒は2人であった。教師は増田精平の姪にあたり、神戸英和女学校を卒業した増田シズであったが、無給で働き2人の生徒に英語を教えたが、程なく生徒は増え、翌年には40名ほどになっている。この頃在学していた生徒に遠田ステという美人がいたようである。この女性が夏目漱石の『坊っちゃん』の中に出てくるマドンナのモデルだと言われている。その後、二宮は1891年(明治24年)に松山夜学校(現松山城南高等学校)を設立して労働者教育にも尽力したが、松山教会から長期の休暇をもらい、巡回伝道師となって各地を援助する。なかでも、先の1887年にすでに設立されていた高知の土佐教会(現日本基督教団土佐教会)が、自給困難の状況に陥っていたのを助け、自給独立の実現に向けて献身的な援助をしている。1903年(明治36年)には松山教会牧師を辞して上京し、霊南阪教会の再興を図るために牧師に就任している。

時雄は、今治にいた6年8ヶ月の間に、愛媛県内にキリスト教の教えを伝え、1883年(明治16年)8月18日には今治教会に婦人会を組織するなど、女性の社会的地位を高めるための大切な土台を築くことに情熱を傾け尽くした。彼が1879年(明治12年)9月に今治教会牧師に就任した時、その報酬は6円であった。そのうち3円50銭が信徒からの献金、2円50銭が愛隣社員からの献金であった。彼は俸給について何ら要求することなく、与

(49) 前掲論文(12)のp. 11. を参照し、筆者がまとめた。

えられたもので満足し、極度の献身的生活をしたといわれる。こうして今治教会さらには県内の教会発展のために尽力した伊勢時雄牧師であったが、日本全体の伝道に急務を感じ、惜しまれつつ1886年（明治19年）3月今治を去る。伝道会社西部専任委員として同志社に留まるが、この折り、結婚僅か5年で妻峰子を亡くしている。1887年（明治20年）8月上京して本郷教会の牧師となり、11月には柳瀬義富（明治16年3月、時雄より受洗）の五女で神戸英和女学校を卒業したばかりの豊（父と同時に時雄より受洗）と再婚する。本郷教会堂建築費募金のため1889年（明治22年）渡米、翌年帰国し1891年（明治24年）献堂する。1897年（明治30年）6月に40歳で同志社第3代社長兼校長となるが、政府の文教政策と同志社の教育とを調停しようとした、いわゆる「要綱削除問題」で挫折し、1898年末に辞任する。その後、政治的関心が強くなり、1901年（明治34年）逓信省官房長に就任、「腹の白い横井が、腹の黒い明治政府の官吏となった」と親友の内村鑑三をして嘆かせた。逓信省勤めはわずか2ヶ月に満たなかったが、西園寺公望の寵を受け、1903年（明治36年）と1908年（明治41年）には岡山県から政友会の代議士として2回当選し、かつ東京日々新聞主幹も務めるが、日本精糖汚職事件に連座して1909年（明治42年）7月には重禁固5ヶ月の刑に服している。1919年（大正8年）には第一次世界大戦のパリ講和会議に随行し活躍、その功績で勲三等旭日中受章を授与されるが、突然、脳溢血で倒れ、半身不随となって8年間、1927年（昭和2年）療養中の別府で70歳で永眠する⁽⁵⁰⁾。翌年の4月14日、東京青山会館で時雄を偲ぶ追悼演説会が行われ、親友の内村鑑三は友人のことを心から惜しんで送辞を述べたが、その内容が『故横井時雄君追悼演説集』に残されている。

「横井君は、学者としても宗教家としても、ま

た政治家としても失敗し、何事にも貫徹することなく一生を終わった、と言う人があります。しかし、横井君は、成ろうと思えば学者、宗教家、政治家のどれにも成ることができたのです。その才能は明治時代の日本人の誰にも劣りません。成れなかったのは、君の性質がそうさせたのです。君は第一に正直でした。第二に父親から受け継いだ強い愛国心がありました。第三にキリスト教信者としての深い信仰がありました。けれども神様はよくご存じです。横井君にとって、その残りの生涯がもっとも大切なものであったことを。君の長所であり、また短所であったことは、君が、あまりに国家社会のことを考えて、自分のことを考えなかったことです。君は生涯の終わりに、君が青年時代に見出した神の子イエス・キリストを心に迎えました。今は、この世の知識も、政治も、宗教も、君の清い心を誘うことなく、英語で、

Nearer my God to Thee

Nearer to Thee【主よ御もとに近づかん】

（賛美歌320番）

と賛美歌を歌いながら、静かに眠ってくれたと信じます⁽⁵¹⁾」

(7) おわりに

本稿においては、「キリスト教の四国伝道」と「今治教会の設立」を中心に論じたが、それ以外にもここでは詳しく取り上げることができなかったが、今治教会の信徒として活躍した、今治綿業の父と称される^{やの しちさぶろう}矢野七三郎（1855-1889）、父親の^{ちゅうしち}忠七とともに今治港の扱^い高を飛躍的に増大させた^{いらいゆう たろう}飯忠太郎（1865-1956）、タオルの製造を今治において本格的に開始した^{あべ へいすけ}阿部平助（1852-1938）、「二挺^{に ちようおさ}箆バツタン」と呼ばれた高速タオル織機を開発し、タオルの生産量を全国区に押し上げた^{ふもとつねさぶろう}麓常三郎（1868-1929）、タオルは白いも

(50) 前掲書(11)のpp.108-109, を参照し、筆者がまとめた。

(51) 内村鑑三「故横井時雄君の為に辯ず」卜部幾太郎『横

井時雄君追悼演説集』アルパ社書店, 1928, pp.50-58, を参照し、筆者が意識した。

のというイメージを払拭し、染色を施すことを発案した中村忠左衛門 (1882-1945)、初代波止浜造船社長の石崎金久 (1888-1982)、初代四国ガス社長の滝勇 (1886-1963)、など地元産業界の発展に大きく貢献した人々の名をあげることができる。これらの人物はいずれも今治教会に属した信徒たちでもあったことは特筆すべきことである。最後に本稿のまとめとして、今治教会が今治の近代化において、どのような役割を果たしたのかということについて筆者の見解を述べておく。

幕藩体制が崩壊したことによって、世の中は一変し、日本中が何を信じればよいのかわからない状況となった。江戸幕府による儒教、仏教を重んじた諸策にかわり、明治新政府によって神道の国教化がはかられるようになると、仏教界は衰退を余儀なくされ、巻き返しをはかるといふ混乱状態に陥ってしまう。また、開国後プロテスタント系のキリスト教が本格的に伝道されはじめると、一層混乱の状況が増し、宗教界全体が人々にどのようにして教化をはかるといふ模索し始めた時代でもあった。そのような中で今治の町人の多くが生活信条として選択したのが、J.L. アッキンソンによって伝えられた米国会衆派によるキリスト教の思想であった。カトリックよりも隣人愛を説き、一般信徒の結びつきを重視するこの会派の教えは、新しい明治の時代に不安を抱いていた人々が共属感情を持って集うことのできる1つのコミュニティとしての教会を形成するためには有用であった。この教会組織を母体としたコミュニティを通して信徒たちは、西洋の進んだ学問・知識を受容できたために、各地の教会は最新の情報発信基地として機能していった。江戸時代には本格的な商業資本主義が確立されはじめ、町人たちがもたらす利益は武家にも歓迎されたが、利潤の追求を目的とする町人としての行為自体は多くの武士階層にあった者からは見下されていた。しかし、教会を通じて商業行為が肯定される世の中へと変わっていったことによって町人は自分たちの生き方に自信を抱くようになっていく。こうした背景において、今治の信徒たちは町人を中心に絆

を深め、職業倫理に生きることが、日本の近代化を推し進めると信じた。そのため、教会員一人ひとりが禁欲的な職業倫理に生き、身分の分け隔てなく豊かな者も貧しい者も互いに助け合いながら、封建時代を脱して自らの信仰の結びつきによって市民社会を形成していったのであろうと推測することができる。伊勢時雄牧師によって教勢を増した今治教会は、四国のキリスト教コミュニティの拠点として神戸教会と結びつきを強め、西日本における一大コミュニティネットワークを形成していったと推測される。このことは、勝海舟や海老名弾正、板垣退助、片岡健吉らが来今していることや、監獄教誨師として不良少年の更生にあたった留岡幸助や文壇で活躍した徳富蘆花が伊勢を頼って一時期今治に身を寄せていたこと、伊勢が今治を去った後も、救世軍の山室軍平やキリスト教社会主義者の賀川豊彦ら数多くのキリスト教関係者が今治の地を訪れていることからわかる。また、これらコミュニティで得た情報は、人々が生きていくうえでの糧にもなっており、生涯の雄図構成にも影響を与えていたと考えられ、高い志を持った者のなかから、今治産業近代化の基礎を築く人材が輩出されていくことになる。これらの理由によって、明治期において活躍した人々が今治教会から多数輩出されていくことになったと結論づける。

〈参考文献一覧〉

- ・愛媛新聞 (マイクロフィルム版) 『愛媛新聞 第六號』1876, 愛媛新聞社。
- ・愛媛新聞 (マイクロフィルム版) 『愛媛新聞 第拾五號』1876, 愛媛新聞社。
- ・米國遣傳教使事務局 『眞の道を知る近路』1878。
- ・藤嶋了穩 『耶蘇教の無道理 第一編』1881, 弘教講社。
- ・内村鑑三 「故横井時雄君の為に辯ず」 卜部幾太郎 『横井時雄君追悼演説集』1928, アルパ社書店。
- ・徳富健次郎 『黒い眼と茶色の目』1939, 岩波書店。
- ・日本基督教団今治教会 『八十年記念誌』1959, 原商会印刷部。

- ・今治市役所『今治市誌』（復刻版）1973, 名著出版.
- ・三井久『近代日本の青年群像 熊本バンド物語』1980, 日本YMCA同盟出版部.
- ・高尾哲「J.L. アトキンソン博士による最初の四国伝道」『松山東雲短期大学研究論集 第14巻』1983, 松山東雲短期大学.
- ・愛媛県史編さん委員会『愛媛県史 資料編 学問・宗教』1983, 愛媛県.
- ・愛媛県史編さん委員会『愛媛県史 学問・宗教』1985, 愛媛県.
- ・高尾哲「J.L. アトキンソン博士の四国伝道」『松山東雲短期大学研究論集 第18巻』1987, 松山東雲短期大学.
- ・三浦綾子『ちいろば先生物語』1987, 朝日新聞社.
- ・竹中正夫「宣教師J.L. アッキンソンの伝道とその性格」『基督教研究 第49巻 第2号』1988, 基督教研究会.
- ・『日本キリスト教歴史大事典』1988, 教文館.
- ・マックス・ヴェーバー 著 大塚久雄 訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』1988, 岩波書店.
- ・日本基督教団神戸教会『近代日本と神戸教会』1992, 創元社.
- ・高尾哲「四国伝道旅行記（第一部）」『松山東雲女子大学人文学部紀要 第7巻』1999, 松山東雲女子大学.
- ・今治近代産業史顕彰委員会『商工都市今治の夜明け』2001, 越智彦印刷.
- ・愛媛新聞社『発掘 えひめ人』2002, 愛媛新聞メディアセンター.
- ・菅紀子『日本少年 重見周吉の世界』2003, 創風社出版.
- ・阿部克行「キリスト教思想と殖産興業への道」『今治の歴史風景』2004, 今治城築城・開町400年実行委員会.
- ・倉田和四生『留岡幸助と備中高梁』2005, 吉備人出版.
- ・マーク・R・マリンス 著 高崎恵 訳『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』2005, 株式会社トランスビュー.
- ・飯峯明「今治教会創成期の人々」『創立130周年記念誌』2009, 日本キリスト教団今治教会.
- ・柿本真代「初期同志社英学校に学んだ真鍋定造の軌跡」『新島研究 第102号』2011, 同志社大学同志社社史資料センター.